

芸術実践者のための研究方法論Ⅱ：マルクス主義（前編）

梅 田 力

星槎道都大学研究紀要

美術学部

第2号

2021年

## 芸術実践者のための研究方法論Ⅱ：マルクス主義（前編）

梅田 力

キーワード マルクス主義 方法論研究 芸術実践 Practice-based Research

### 要約

芸術実践者のための研究方法論の研究。第2回はカール・マルクス（1818-1883）の残した思想・哲学を基にして展開されてきた「マルクス主義」を取り上げた。また、本稿では、マルクス主義の理論を具体的に検討する前段階として、その概要を示すこととした。この理由は、芸術実践とマルクスの理論がどのように関係しているのか、なぜ検討する必要があるのか、まず明らかにする必要があると考えたからである。

広がり続ける社会的格差、深刻化する環境問題、ベーシック・インカムへの導入が議論されるなど、資本主義が生み出したとされる社会の歪みと、その限界が叫ばれて久しい。こうした時代の中、資本主義への鋭い批判をしたマルクスの思想を再検討することは有意義である。また、社会問題を積極的に扱う傾向にある現代美術において、マルクスの思想は多くの示唆を芸術実践者に与えてくれる。

科学的社会主義と言われる、マルクスの世界観の根幹を成すのは、弁証法的唯物論である。これはフォイエルバッハの唯物論と、ヘーゲルの弁証法を参考にし、最終的にはそれらを批判する形で、作り上げられたマルクスの世界観である。

この世界観から、人間はまず何よりも衣食住が必要であり、そのために人間は自然に手を加え、生産する事で、生きる事ができる。そして、この生産（経済）活動という土台（下部構造）の上に、我々の思想や政治、文化そして芸術が成り立つ（上部構造）とマルクスは考える。

マルクスの理論から芸術を眺めると、造形や構成を絶対的に追求する芸術理念と正面衝突を起こす。また、作家の思想や作品を経済的背景から分析していくため、構成や色彩、様式や美術史、図像学的なアプローチとは違った見方や解釈が行われ、それらの価値や作家の位置付けが変わる事を示唆するのが、マルクス主義の特徴的な方法論と言える。

### はじめに

#### 1) 本シリーズについて

本シリーズの目的は方法論の研究と紹介である。研究における方法論とは、「哲学から始まり、研究結果の解釈および公表までを含む研究プロセスのこと」(Creswell J. W, 抱井訳)<sup>1</sup>と定義されている。研究をする上での哲学的前提（パラダイム・世界観：世界をどのように見ているのか）から始まり、設問設定、そしてそれに応えるためのデータの決定、そのデータの採集方法まで、深く関わるものが方法論だと言える。留学先の大学院で初めてこの方法論と言うものに触れ、その難解さに狼狽ながらも、強く惹きつけられた。

この方法論に惹きつけられ続けている理由を改めて考

えてみると、方法論を研究することは、実は著者の芸術実践にも関わるためというのが、大きな要因の1つであろう。この方法論は、果たして芸術実践は知になり得るのか、それも伝統的な学術の文脈の中で、知的な貢献をし得るのか。そう言った問いに、答えるための道筋を示すだろうし、自身の作品や、その過程での気付きは、言語では言い換えられない、何らかの真実を掴み取るものとする著者にとって、その「何か」を学術的に定義付け得る可能性を持つのが、方法論であると感じているからである。そこで、毎年執筆する機会のあるこの大学紀要で、少しずつではあるけれども、これまで芸術の研究分野で扱われて来ている主要な方法論を取り上げ、その方法論から自身の実践を考察し、仮にはあるが、設問設定をするところまでを試験的に取り行ってみる事で、

<sup>1</sup> Creswell, J. W 早わかり混合研究法 抱井尚子訳) ナカニシヤ出版 2017

自身の芸術実践を見つめ直す機会となればと考えたことが、本シリーズをはじめた主な動機である。

また、こうして毎年方法論を紹介することで、現在美術大学等で、芸術実践を学ぶ大学生や大学院生の手引きとなるのではないかと考えている。なぜなら、この方法論研究には、少なくとも以下の3点が、現代の美術教育に求められる能力と結びつくからだ。

1つ目としてあげるのは、近年、(著者が留学先で経験したように) 芸術実践にも学術的な研究が求められ、その中でも方法論を学術的に確立する必要性が高まっている事があげられる。

東京藝術大学が2012年に示した芸術実践における研究に関するレポートでは、芸術実践に基づく研究(Practice-based Research)という芸術独自の研究方法を確立していく上で方法論の検討が重要だという結論を出した<sup>2</sup>。

また、伝統的な学術分野が芸術へ関心を持ちはじめていることも見逃せない。東京大学が2019年に設立した芸術創造連携機構を例に、芸術実践の過程や成果を、様々な視点から分析する科学的な研究に注目が集まっている。こうした時代の流れの中で、芸術実践者はただ分析される対象にとどまる事なく、芸術実践者の側からも学術に近づき、ともに新たな知を築く事が必要だと著者は考える。

第2に、ますます“知的ゲーム化”する現代美術の世界において、より高度な概念や理論、思想の理解が必要とされていることが挙げられる。方法論の研究は、思想や概念を学術的に扱うから、そこで得た知識は研究の領域に留まらず、実践においても有用である。

そして3つ目に、そういった現代美術の流れに対応する意味で、美術系とは言え、大学や大学院で実践(制作)の技術を獲得するだけでは、現在の時代に求められている美術の専門的な能力を身につけたとは言いがたく、専門教育の目的を果たしているとは言えなくなっている実情がある。

このように、自身の方法論研究の成果を簡単にまとめたガイドブック的なものであるにしても、形にすることで芸術実践を学ぶ大学や大学院生の方法論の手引きとなるのではないかと考えたのが本シリーズを執筆する2つ目の理由となった。

こうした中で、シリーズの第1回目はE・サイドの著書「オリエンタリズム」を使って、ポスト・コロニアリズムの概要を述べた。そして本稿、シリーズの第2回

目は、マルクス主義を取り上げることとした。詳しくは後述するが、マルクスの残した思想や理論体系は広範囲にわたる。また、美術と経済学思想家が関係するのか、説明が必要であると感じた。そこで、マルクス主義は2回にわたって執筆をすることとし、本稿はその第1回目、導入編とした。

## 2) 研究の進め方

今回取り上げる「マルクス主義」は、美術大学で芸術実践を学ぶ多くの大学生にとって、あまり馴染みがあるとは言えないだろう。もしかしたら、経済や資本主義といった言葉にアレルギーを引き起こす学生さえいるかもしれない。美術の実践を専門に学びに来た学生にとって、その反応は理解できるものである。しかしその一方で、だからこそマルクス主義の方法論から芸術分野について考えた場合のインパクトは大きいとも言える。このような事情を鑑み、今回はなぜマルクスなのかという点を説明する所から始め、その理論の概要を述べて全体像を明らかにし(前編)、その後で具体的な理論を検討し、最後に著者の実践を参考に考えられるリサーチアクションを立ててみるという手順を踏む事とした(後編)。

マルクスの理論について見ていく上で、まず理解しておきたいことがある。それは、彼の残した著書に纏わる解釈の問題である。

マルクスはフリードリヒ・エンゲルスとの共著が多い。また、マルクスの遺稿を基にエンゲルスが書いた著作もある。そのため、研究者の間ではこのエンゲルスをどのように扱うかでも見解が分かれる。具体的には、エンゲルスがマルクスの思想を曲解しているか・いないか。その場合どの点において、どの程度それが言えるか、専門家の解釈が分かれる。こうした文献の解釈を巡る問題は、マルクス主義に限らず起こりうるとはいえ、マルクスの著者については特に気をつける必要がある。

次に、マルクスは200年以上も前の1818年に生まれ、資本論の第一部が書かれたのは1867年と150年以上前である。そしてマルクスの思想は世界的にも大きな影響を与え、様々な解釈が、様々な人々によって長い年月なされてきたという点も理解しておかなければならない。

こうした文献の特徴、その他の著作や遺稿等との関連を、歴史的な位置づけなども考慮しながら注意深く研究するのは、その分野を専門にする研究者の仕事であり、芸術実践者が同じ方法を取り、何か新たな知見を示すという事は非常に困難であるし、その必要性は感じられない。

それでは芸術実践者は何をすべきであろうか。それ

<sup>2</sup> 東京藝術大学芸術リサーチセンター成果報告(2008-2012年度) <https://www.geidai.ac.jp/rc/index.html>

は、ここで示されるマルクスの基本的な理論を使って1) どのような実践を行うか、2) 実践の結果にどのように影響を及ぼしうるか、あるいは3) 実践の結果やプロセスをどのように解釈しうるかを考察していくのが、芸術実践者だからこそ出来る、「実践に基づく研究」(Practice-based Research) であると著者は考える。そして、このような実践による研究を通じて、例えばマルクス研究者がこれまで気がつかなかった、マルクス理論の活用法や問題点を提供したり、新たな気づきを与えたりするのが、学術研究分野における芸術実践者の役割だと考えるのである。

こうした特徴を踏まえると、芸術実践者が様々な方法論や理論の理解を進めていく上で大切なことは、必ずしも難解で膨大な量にのぼる原著に当たる必要はない。当然、学術的には最終的に原著にあたる必要はある。しかしながら、研究の初期段階でいきなり原著に当たるべきではない。今回の方法論研究で言えば、マルクスを調べるからといって、マルクスの原著に全て目を通していたら、それだけで膨大な時間がかかってしまい、制作も出来なくなってしまふ。それよりもマルクスについて、出来れば日本語で書かれた解釈本を探し出し、それを参考に、マルクスの残した基本概念を理解し、実践に応用出来るようにする事の方が大切だし、現実的だ。

そこで重要になってくるのは、どの解釈・見解に立脚するのか。これを慎重に検討した上で、決定する必要がある。今回、参考にしたのは2017年に発行されたマルクス研究会誌より、斎藤幸平、佐々木隆治による「日本における「資本論」翻訳史」<sup>3</sup>と、2018年に八木紀一郎が現代の理論で述べた「日本アカデミズムの中のマルクス経済学—分岐と変貌—」<sup>4</sup>である。前者はマルクスの主著の1つ、「資本論」の翻訳と翻訳者達の歴史ではあるが、思想的なものの翻訳には、翻訳者もその学術研究の第一線で活動する思想家であるとみなしえるから、斎藤・佐々木によって取り上げられている翻訳者の中で、比較的客観的にマルクスの思想について網羅的に述べている著書を書いているものをピックアップして、そこに書かれている理論を基にした。またこれに加えて、芸術分野のための方法論を網羅的に扱っている *Anne D'Alleva Methods & Theories of Art History*<sup>5</sup> と照らし合わせながら、およそマルクス主義の基本的な理論を取り出すこととした。これに加え、日本のマルクス研究は、世界的

に見ても活発であったので、日本語での著作だけでも、様々な意見が窺い知れるだろう。この知的功績は、日本語を母国語とする筆者としてはありがたく、利用するのが得策であろうと考えた。

こうした中、具体的に参考としたのは、向坂逸郎、廣松渉、今村仁司の3者の新書も含めた入門書である。今村の思想は、斎藤(2017)によって批判をされているが、比較的新しく出版されたものであり、また客観的にマルクス主義の思想を端的にまとめているので、参考になると考えた。

日本のマルクス経済学研究では、宇野弘蔵が残した思想、いわゆる宇野派の影響力が大きい。宇野派は独自の解釈をしている点で、今回我々が求めているマルクスの基本的な思想・理論とは異なると考え、参考にはしなかった。

### 3) なぜ今マルクスなのか

マルクス主義の「マルクス」とは、哲学者、経済学者また革命活動家としても知られるカール・マルクス(1818-1883・独)の名前が由来である。彼の残した著作を解釈して、その思想を受け継いだものがマルクス主義である。

研究方法論シリーズの第1回で取り上げたポスト・コロニアリズム理論を始め、フェミニズム、現象学、エスノグラフィー、混合研究法等、様々な方法論があるが、個人名が冠されているという点でマルクス主義は異色に映るかもしれない。

マルクスについて、多少なりとも知識のあるものは、マルクスと言えば、現実的には成功しなかった社会・共産主義の国が標榜した理論を打ち立てた人物。さらに、彼は経済に関する本である「資本論」を書いたことで有名な人物であり、経済学者と美術の実践になんの関連があるのか、実践を行う読者は疑いたくなるかもしれない。

しかしながら、マルクスは経済についてあれこれと考えた結果、著作を残したというより、様々な思索の末に、唯物的思想にたどり着き、物質的な生産活動(経済)を、世界の根本原理として考え、そこから壮大な哲学を打ち立てていった。したがって、この壮大な思想は、単に経済学と言う学術分野にある1つの理論という括りでは、到底表すことは出来ず、むしろ、彼の残した思想には、政治や文化、芸術の根本的な成り立ち、さらには世界の

<sup>3</sup> マルクス研究会年誌(日本における「資本論」翻訳史)2017年 [http://www.marxresearchsociety.com/\\_common/doc/yearbook\\_v1.pdf](http://www.marxresearchsociety.com/_common/doc/yearbook_v1.pdf)

<sup>4</sup> 現代の理論—「日本アカデミズムの中のマルクス経済学—分岐と変貌— <http://gendainoriron.jp/vol.16/rostrum/ro02.pdf>

<sup>5</sup> *Anne D'Alleva Methods & Theories of Art History*, Laurence King publishing Ltd, 2012

根本原理までも示唆している。このマルクスの思想の基本概念を「弁証法的唯物論」と呼ぶが、この思想に関しては後編で改めて解説する。

もう1つ、マルクスを語る上で重要な点が、資本主義への鋭い批判をしたことである。マルクスは産業革命が起き、近代的な労働環境が整えられていった時代を生き、次第に社会の在り方となっていく「資本主義」の問題点をいち早く察知し、厳しく批判した。その批判は、資本主義は構造的に、資本家が労働者から労働による生産価値を搾取することで成り立ち（剰余価値説）、その構造は社会に激烈な競争と格差を生み続け、その溝は広がり続ける。そして、これまで人類が歴史の中で、繰り返して来た階級闘争と同じく、時が来れば資本主義と言う社会システムが限界を迎え崩壊する。そして、その行き着く先には、階級のない協同的な世界が生まれていくと主張した。

こうしたマルクスの思想は、世界中で大きな反響を呼び、ロシアや中国をはじめ多くの国で共感を呼び、社会主義の国が誕生した。マルクスの思惑とは裏腹に、これらの国の社会主義は失敗に終わり、その思想的な基盤となったマルクスは、失敗に終わった社会主義を考え生み出した思想家と一般的に考えられることになった。

しかし、実際には、マルクスの思想が一人歩きして様々な解釈をされてきたと言う事実。また、現代社会の非常に大きな問題となっている格差社会は、マルクスが資本主義を分析する中で、予想していたと言う事実があることから、マルクスの説いた思想が全て失敗だったと判断することはできない。さらに、近年では政策案の1つとして上がっているベーシック・インカムの議論は、(必ずしもマルクスの哲学とは一致しない部分もあるが)資本主義による社会の歪みを是正する動きであると言え、少なくとも資本主義が問題を抱えている事を表しており、その点で、資本主義の問題点を指摘した、マルクスの思

想は今改めて、再び注目される価値があると言えるだろう。

また、社会問題を積極的に扱う傾向にある現代美術において、マルクスの思想は多くの示唆を芸術実践者に与えてくれる可能性を有している。こうした理由から、改めてマルクス主義について考察していくことは有意義であると結論づけられる。

以上、本稿ではマルクス主義について考えていく前半として、本シリーズを行う理由。本稿を執筆する上で実際に行った調査の方法。また芸術実践者だからこそ出来る研究の方向性も示した。次いで、今なぜマルクスなのかを述べて、具体的な理論を取り上げて検討する前慣らしとし、マルクス主義方法論研究の前編とした。

#### 参考文献

- 1) 廣松渉 今こそマルクスを読み返す 1990年 講談社現代新書
- 2) 向坂逸郎 マルクス経済学の基本問題 1962年 岩波書店
- 3) 今村仁司 マルクス入門 2005年 ちくま新書
- 4) Anne D'Alleva Methods & Theories of Art History, Laurence King publishing Ltd, 2012
- 5) マルクス研究会年誌(日本における「資本論翻訳史」) 2017年 [http://www.marxresearchsociety.com/\\_common/doc/yearbook\\_v1.pdf](http://www.marxresearchsociety.com/_common/doc/yearbook_v1.pdf)
- 6) 現代の理論—「日本アカデミズムの中のマルクス経済学—分岐と変貌— <http://gendainoriron.jp/vol.16/rostrum/ro02.php>
- 7) Creswell, J. W 早わかり混合研究法 抱井尚子訳 ナカニシヤ出版 2017
- 8) 東京藝術大学芸術リサーチセンター成果報告(2008-2012年度) <https://www.geidai.ac.jp/rc/index.html>

## Methodology Study for Art Practitioner II: Marxism (First volume)

UMEDA Isao

### Abstract

This is the second of Methodology study for Art practitioner series. In this essay, we investigate methodology of Marxism that is invented by Karl Marx (1818-1883) and his successors who has been handed down Marx's ideas and philosophies. The first part, the essay provides overview of his ideas before introducing his complex theories respectively. The reason of this is that it may be considered there are gaps between Marx's theory and art practice. Therefore, as introduction of methodology study, how it influenced to art practice and why art practitioner may consider him briefly explained.

Expanding social gaps, increasing severity global environmental issues, discussing basic income policy those are the indication of the limit and the result of deformed shape of capitalism. In this era, reconsider Marxism which sharply criticized capitalism may be worthwhile. Moreover, the trend of contemporary artists positively manipulates social issue in their expression so that studying Marx's ideas may be suggestive for them.

Dialectical Materialism is the central of his paradigm, and his view is called Scientific socialism. The idea was influenced by materialism of Ludwig. A Feuerbach and dialectic of Hegel. Marx criticised the predecessors and created his own paradigms.

Based on this, he explained the human nature that food, clothing and housing take precedence. The nature reform somehow for human necessity that is called production. The production (called base) provide politics, ideas and then culture and art ride on the upperdeck (called super structure).

Marxism paradigms and pursuing pure or absolute form of art, the two ideas collide head-on. Furthermore, Marxism analyze works of art and artists from economic situation rather than composition and color, style and history of art, iconography, hence the value of works of art and artists maybe differentiate from the other analysis that is features of Marxism methodology.

